

現代高校生の進路選択 —相談相手の選択に注目して—

中西啓喜（青山学院大学大学院）

1. 問題の設定

現代高校生の進路選択は多様化しているといわれている。具体的にいえば、高卒就職者が減少し、短大や専各を含む進学者が増加しているのである。

中村（2008）は、高卒就職者の実績関係による就職システムのゆらぎ、非進学校からの進学、といった高校生の進路形成の変容といった現象の結節点になるのが専門高校を含めた進路多様校であるという。中村の指摘を踏襲し、本研究で現代高校生の進路形成を分析してゆくにあたり、その対象を非進学校とする。

現代の高校生の進路選択に関する研究の多くは、高卒無業者ないしニート・フリーター研究の文脈での蓄積が多い（例えば、荻谷他 1997、荻谷他 2002）。それらの研究は、進路選択に際する「メリトクラシーの弛緩」を指摘してきた。そのため、学校から職業への移行に困難を抱える若者を支援するための方策として「移行ネットワーク」の重要性が指摘されている（堀 2006）。現代の高校に求められる機能は、生徒の進路を学力により「選抜」するよりも、生徒がスムーズに「選択」できるように「支援」することなのである。千葉・大多和（2007）は、現在の進路多様校の進路形成は、生徒個人の能力やアスピレーションといった個人が所有する要因が相対的に低まり、学校内での構造的なインタラクションの要因が大きくなっていると示唆している。

このような現状は、生徒が高校の進路指導に乗ってこななければならないという難しさもまた孕んでいる。とはいえ、学校による進路指導は、高校生にとって進路選択を行うに際して、平等に与えられた活用できる最も有用な資源であるといえよう。では、教師の進路指導は、一体どのような生徒に対して有効となるのであろうか。本研究の目的は、これを分析することである。

これまでに蓄積されてきた研究では、高校生の進学希望を規定するのは、①性別、②成績、③出身階層、④高校ランク・タイプとされてきた（岩木・耳塚 1983 など）。確かに、これらの要因は現代であっても重要な要因となっているだろう。しかし、それらは、高等教育への進学が選抜により決定していた時代においては、高校生の進学希望を説明するのに最も有効な要因であったであろうが、進路「選択」に関してはその限りではないかもしれない。

18歳人口の減少から、選抜機能が不全になった高等教育へのアクセスには、選択が重要になり、それには、親の経済力といった生徒の出身社会階層の影響があることを指摘した研究は多い（例えば、耳塚 2000 など）。

一方で、千葉・大多和（2007）のように、進路指導の重要性を強調する研究もある。

本研究では、高校が選択支援機関と化した現代における高校生の進路選択を規定する要因に、生徒の出身社会階層と教師の進路指導に注目して分析を行ってゆく。

2. 調査地とデータの概要

分析に用いるのは、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラムの一環として行われている追跡調査 Japan Education Longitudinal Study (JELS2006) のうち、東北 C エリアの公立高校 3 年生のデータである。調査高校数は 6 校で、回答者数は 950 人であった。ただし本研究の分析では、専門高校を含む進路多様校を分析の中心に据えるため、進学校は分析から除く。よって、分析対象は 4 校、対象者数は 543 人である。

まずは、彼ら・彼女らの希望進路を記述しよう。すると、4 大=17.7%，短大=8.5%，専各=19.5%，就職=50.5%，その他=3.9%であった。進学希望と就職希望が半々になっていることがわかる。

次に、高校生が進路選択する際に相談する人物を記述する。「自分が進路を選択する上で、誰の意見が最も重要になりましたか」という質問項目に対し、回答には、「高校の先生」「保護者」「学校の友達・先輩」「学校外の友達・先輩」「アルバイト先の上司・先輩」「塾・予備校の先生・チューター」「その他」「誰にも相談していない」の 8 つの選択肢を準備した。それぞれの割合は、高校の先生=38.9%，保護者=36.0%，学校の友達・先輩=13.2%，学校外の友達・先輩=5.0%，アルバイト先の上司・先輩=2.1%，塾・予備校の先生・チューター=0.2%，その他=4.6%，誰にも相談していない=0.0%であった。

高校 3 年生のほとんどが高校の先生か保護者に相談していることがわかる。そこで、本研究では、教師と保護者に分析対象を絞り、「保護者」という選択肢との対比から、相談相手に教師を選択した生徒を、「進路指導に乗った生徒」と位置づけ、分析を行ってゆく。

3. 分析と結果

まず、相談相手は、高校生の進路選択と統計的な関連があるのかをクロス集計およびカイ二乗検定により分析してゆく。4 年制大学進学希望を従属変数、選択した相談相手を独立変数に設定し、クロス集計表を作成した。その結果、相談相手の選択が関連していた ($\chi^2(\text{d.f.})=11.646(1)$ $p<.001$)。具体的には、相談相手に保護者を選択した生徒よりも、教師を選択した生徒の方が、大学進学希望になるのである。

次に、出身階層と大学進学希望との関連を分析した。その結果、先行研究の知見と同様に、父学歴が高いと生徒も大学進学を希望するという結果が得られた ($\chi^2(\text{d.f.})=4.050(1)$, $p<.05$)。

そして、教師の進路指導に乗っている生徒は、出身社会階層が高い可能性があるため、父親の学歴をコントロール変数として、先と同様に、従属変数を 4 年制大学進学希望、独立変数に選択した相談相手を設定し、クロス集計分析（三重クロス集計表の作成）を行った。その結果、父親学歴に関わらず、進路指導に乗った生徒の方が、大学進学希望になるということが明らかになった。

この知見は重要である。それというのも、データの制約があったとはいえ、千葉・大多和 (2007) の研究は、社会階層の要因をコントロールできないでいた。彼らの研究の問題点を具体的にいえば、「階層→進路指導に適応→進路選択」の可能性を残していたのである。それに対し、本研究での分析が明らかにしたのは、階層要因をコントロールしても、学校での進路指導は、生徒の進路選択に影響を持つのである。千葉・大多和が明らかにした知見をより精緻化したところに本研究の価値はひとまずあるだろう。

*データの詳細は当日配布資料参照のこと